

改めて言うまでもなく、遺跡とは、遺物が出土し、遺構が検出される場所であり、考古学の研究においては過去の文脈で理解されるべきものである。一方、1970年代以降、欧米で発達し、近年、日本でも研究が深化しているパブリック・アーケオロジーの観点では、遺跡に価値が与えられた時点で、「遺跡化」が達成されたとみなされ、その時点で遺跡の時制は過去ではなく、現在に属することになると理解される。この場合、遺跡に与えられる価値はさまざまであり、地元住民、政治家、観光業者、考古学者などの「利害集団」が、それぞれ遺跡に対して異なる価値を与え、何らかの利害を見出しているという。

利害集団による遺跡や文化遺産に対する価値が衝突することもしばしばであり、開発と遺跡保存のせめぎ合いなどは日本を含め、世界的にも日常茶飯事だ。価値観の相違が意図的な遺跡の破壊につながることもあり、イラクやシリアでは、「イスラム国」が著名な遺跡や歴史的建造物を暴力的な破壊の対象としたことは記憶に新しい。一方、イスラエルの場合については、遺跡に与えられる価値が、宗教やナショナリズムといったイデオロギーに偏っている可能性がこれまで指摘されてきた。確かに、旧来の「聖書考古学」は、旧約聖書の記述を考古学的なデータから裏付けようとする方向性を持ち、また、イスラエル建国後は、ナショナリズムと結びついた形で、王国時代の遺跡が現代国家としてのイスラエル存立の正当性を歴史的に証明する材料とされ、国家的なシンボルを求めた遺跡の発掘調査が行われたことは事実のように思われる。また、ユダヤ民族基金、イスラエル史跡保存、西壁遺産財団、フランシスコ修道会といった非政府団体主導の文化遺産マネジメントでは、特定のイデオロギーに基づいた遺構の保存や展示が行われたことも否めない。

ところが、パブリック・アーケオロジーの観点から、イスラエルの遺跡や文化遺産を研究する岡田真弓氏によれば、これらの傾向を指摘する先行研究の多くは、限られた遺跡や文化遺産マネジメントの事例からの指摘にとどまり、加えて、考古学の方法論に対する批判と遺跡の保存・活用に対する批判が混同されている。こうした問題意識を踏まえ、岡田氏が注目するのが、建国後のイスラエルにおける遺跡の「遺産化」に多大な役割を果たしてきた国立公園・自然保護区制度だ。その制度に基づいて整備が行われた遺跡について、岡田氏が「遺産化」の実態を分析したところ、明らかになったのは、制度ができる1955年以前に政府主導で整備がなされた33遺跡の文化層は、古代イスラエル民族にゆかりの深い旧約聖書時代に属するものが最も多く、次いで、観光資源として開発しやすいローマ時代が多いということだ。建国当初、近代的な民族国家建設をめざしていたイスラエルは、文化遺産マネジメントにおいても脱宗教化を試行していたが、1955年までの段階では、古代イスラエル王国と関係の深い聖書時代である鉄器時代が文化遺産マネジメントにおいて、やはり無視できない文化層だったのだ。

岡田氏は、さらに、1964年以降に保存・整備された遺跡48カ所についても分析を行い、ローマ時代が最も多く、次いで、旧約聖書時代とビザンツ時代の文化層が整備の対象になっていることを明らかにする。しかし、石器時代、ペルシア時代、へ



整備されたベト・シャン遺跡

レニズム時代は発掘調査で検出された文化層の数に比べ、展示された文化層の数は著しく少ない。発掘文化層としても展示文化層としてもローマ時代とビザンツ時代の遺構が顕著なのは、岡田氏によれば、両時代がそもそもイスラエルの文化遺産マネジメントで重点が置かれていたからであり、逆にそれ以外の時代の文化層は、イスラエルの歴史的・文化的特性を十分に物語るほどの遺物・遺構を伴わず、それよりも重要な文化層が優先されたからだ。

結論として岡田氏が述べるのは、イスラエルの文化遺産は先行研究が指摘するようなイデオロギー一辺倒ではなく、時代ごとに思想や社会の要請を反映したもので、これは、イスラエルに限らず、特定のイデオロギーと実際の文化遺産マネジメントを結びつける時には、個別の事象だけではなく、その全体像を分析する必要があるということだ。

かつて、考古学者のB・トリガーは、考古学の歴史を振り返り、イスラエルの考古学は、日本考古学と並んでナショナルな考古学だというレッテルを貼った。日本の考古学者、田中琢氏も、世界で最も考古学の盛んな国はどこかと問われれば、躊躇せずにそのひとつにイスラエルをあげるとして、この国では考古学がナショナル＝スポーツだという人があるくらいだと述べた。しかし近年は、イスラエルの考古学をめぐる社会的状況は大きく変化し、考古学はもはや人気のあるスポーツではなく、考古学離れが進んでいるという。一方、イスラエルでは、建国直後から、政府主導の文化遺産マネジメントにおいて、観光資源として、ローマ時代やビザンツ時代など、見栄えのする遺跡が整備されてきた。イスラエルという国は、とすればマイナスのイメージもつきまとうが、聖書の土地、イエス・キリストにゆかりのある聖地であり、世界中から巡礼や観光のために多くの人が訪れる人気の旅行先だ。遺跡や文化遺産と観光が異なる方向から歩み寄っているのは近年の世界的な動向だが、イスラエルでは、考古学に対する人気の衰えとは裏腹に、グローバル化したツーリズムの高まりの中で、ますます多くの観光客が遺跡を訪れている状況は興味深い。

[参考文献]

岡田真弓 2017『イスラエルの文化遺産マネジメント 遺跡の保護と活用』慶應義塾大学出版会。